イン ザ ヒート オブ ザ ナイト

第１章

10分前に，３時の，朝の、．

町は，ウェルズの、．

沈潜していた，活気なく，暑気とよどみで。

大部分は，その１１，０００人の人々の、．

寝返りをうっていた，いらいらしながら、．

少数の人は，少しも眠りにつけない，呪った，事実を，わずかの微風さえないことの，取り除いてくれる，息苦しくさせる効力を，夜の。

熱気が，カロライナ特有の，八月の、　.
満たしていた，重苦しく，空間を。
月は無かった。
街灯のいくつかの裸電球が，商業地区の、　.
映しだしていた，黒い影を，戸をおろした店や，ようやく生き残っている映画館，　.
人けのないガソリン・スタンドに。
街角にある，町を通り抜けているハイウェイと交わっている，直角に、　.
自動空調機が，サイモン薬局の、　.
動いていた，間断なく，静けさをふるわせて，夜の。

通りの向こう側に、.
一台のパトロール・カーが，ウェルズ町警察署がパトロールをさせている，夜間の、.
停車していた，縁石に沿って。
サム・ウッドは，その運転手の、.
にぎって，ボール・ペンを，しっかり，頑丈な指で、.
記入していた，報告書に。
彼は、.
乗せかけていた，署のクリップボードを，ハンドルに、.
そして、.
記入していた，几帳面な活字体で，わずかな明かりをたよりに，窓からの，車の。

慎重に書き入れた，彼は異常なく終了したこと，もれなく巡察したこと，主だった住宅地域を，町の，　.

指示されている通りに、　.

そして、　.

彼自身が確認した，まったく異状がなかったと。

彼は誇らしく思った，書き留めることに，自分の判断を。

それは彼に再び意識させた，過去三年間そうであったように，まさにこの時間に，夜の、　.

彼が目覚めていて任務を果たしている主要な人物である，町じゅうで。

終えて，記入を，彼は置いた，クリップボードを，シートに，横の、　.

見た，再び，時計を。

三時になるところだった、.

時間である，小休止してコーヒーを飲む時間である，ドライブ・インで。

だが、.

夜のこの暑さは、.

彼に，拒絶させた，コーヒーを飲むのを。

何か冷たいものがいい。

休憩をとるのがいいか，いま、.

それとも、.

通り抜けるのがいいか，先に，貧民街を、.

町の貧民地域の？　それは最もきらいなことであった，彼の仕事で、.

かれがはっきりと嫌うことだ。

しかし、.

やらないわけにはいかない。

思い返して，再び，重要性に，彼の任務の。

彼は決めた，休憩を遅らせることに。

彼は動かした，車を、.

進めた，舗道ヘリから，プロの滑らかさで，優れたドライバーの。

彼は横切った，ハイウェイを，車が走っていない，両方向を見ても。

ガタガタと音を立てて入った，デコボコの舗装路に，広がっているニグロ地域の。

彼は運転した，ゆっくり、 .

思い出して，再び，夜のことを，何か月か前の，時を、 .

彼が轢いてしまった，犬を。

犬は眠っていたのだ、 .

道のまん中に、 .

サムは気付かなかった，それに，間に合うようには，避けて，犬を，完全に。

サムは思い出していた，自分のことを，再び、 .

しゃがみこみ，車道に、 .

持ち上げて，犬の頭を、 .

見入っている，その思いがけないひどい痛み、 .

他人を当てにしている許しを求める目で。

そして、

彼は見た，死が訪れるのを。

彼は屡々出掛けたけれども，狩猟に、

一般には、

見られていたが，気丈な男と、

サムは悔恨にさいなまれていた，その犬にたいし、

悔しさを抱いた，彼がもたらした，その死を。

サムは目を道路に向け、

避け続けた，最悪の事故を，穴によって起こる、

目を配った，犬に。

短い環状道路を，黒人街を通っている、

とおり終わると、

サムは、

ブレーキをかけながら，車に、

でこぼこの踏み切りを渡り、

上り道にかかった，ゆっくりと、

守られている，両側に、

古い見苦しい、

ほとんどペンキのあとも見えない羽目板張りの家屋で。

これが、

貧しい白人たちの地域である、

区域である，人たちの住む，金を持っていない，金が入る見込みがない、

あるいは、

単に、

金について悩まない。

サムは縫うように進めた，車を，その道を、

集中して，見逃さないように，穴を，道路にある。

そして、

彼は目を上げた、

見た、

半ブロックほど先に，彼の、

黄色いゆがんでいる長方形の光の窓枠が見えた、

パーディ家である。

光があるのは，この時間に、

意味しているかもしれない腹痛の人がいることを、

あるいは、

意味しているかもしれない，ほかの何かのことを、

サムは、

嫌いであった，その種の人を，のぞき込むような，人の家の窓を，夜に、

しかし、

警察の警官であれば、

職務中の、

それは事情がちがう。

彼は、

静かに寄せた，車を，歩道の縁石に、

混乱させないように，誰かを，不必要に、

静かに車を寄せた，調べるために，注意深く、

なぜ明かりがついているのか，パーディ家の台所で，3時15分すぎに，朝の、

しかし、

彼自身は分かっていた，理由を知っていることが。

その台所は、

照らされていた，1個の100ワットのはだか電球で、

下がっている，コードで，まん中から，その天井の。

薄い、
くたびれたレースのカーテンが張ってあったが、
グッタリと、
くたびれた感じで，あけ放たれた窓に、
見えないようになってはいなかった，中のものを，明るい台所の。
そこには、
はっきりと見えた、
彼女が背中を向けて、
デロレス・パーディだった。
二度見かけたのだ、
このことがあった、

過去２・３週間に、.
彼女は着ていなかった，ナイトガウンを、.
まさに、.
パトロールカーが達したときに、.
箇所に，窓の外の、.
デロレスは取り上げた，小さな鍋を，ストーブから、.
こちらを向いた、.
そそいだ，鍋の中身を，ティー・カップに。
サムは、.
全部を見た，彼女の 16 歳の両胸と好ましい曲線を，彼女の若さに満ちた大腿部の。

何かが，デロレスの、
しかし、
不快な感じを抱かせた，彼に。
そして、
見てさえ，彼女の裸のからだを、
なにも興味を抱かせないと思った。
その理由は、
彼は想像した、
彼女がいつも貧しくて裸を洗っていない、
あるいは、
そう思わせるからだ。

見たときに、
サムは彼女がカップを口元へ運ぶのを、
彼にはわかった，誰も病気ではないと、
だから、
反らせた，彼の目を。

一瞬、
彼は考えた，警告しようと，彼女に、
彼女が表から丸見えであると、
しかし、
決めた，そうしないことを、
というのは、
ドアをノックすることが，この時間に、

起こしてしまうかもしれないと，家中の子供たちを。

それに、.

ほかにも考えられることは、.

彼女は応答できそうにもないことだった，ドアのノックに，衣服を着けないままでは。

サムは、.

まがった，つぎの角を、.

向かった，ハイウエイの方へ。

何もなかったけれど、.

目に見える車の動きは、.

サムは完全に停車した，交差点で、.

そして向かった，北へ。

彼は車の速度を上げた、.

熱い空気でも感じられるように，明けた窓から入ってくる、.

作り出すように，幻想を，涼風のような。

そして、.

3分間、.

彼は維持した，その速さを、.

所まで，市の境界線が見えてくる。

彼は車のアクセルから足を放し、.

越えて，境界線を、.

入れた，車を，楽に，駐車場に，一晩中営業しているドライブ・インの。

彼は車から降りた，身軽に，一人の男としては，身体のサイズが大きい、．

そして彼は押し込んでいった，そのレストランに。

レストランは暑かった，中は，外より。

中央に、．

部屋の、．

あった，U字型のカウンターが、．

カバーされている，フォーマイカ（商標、テーブルなどの表面に塗る合成樹脂塗料）で。

片側には、．

一列に合板で囲まれたブース（仕切られた席）があり、
居心地が悪そうだったし、
私的な自由を持てそうにない感じだった。

窓の一つで、
およそ役に立ちそうもないエアコン機が一台ついていて、
打ち出していた，わずかな流れを，冷たい空気の、
消えてしまった，感じられなくなって，数インチほどで，噴気孔から，冷気が出てくる。

木の板ばりの壁は、
かつて塗られていただろうが，白い色で，過去に、
そのペンキは黄色になっていた，年月のあいだに。

調理器の上の壁などが、
まっ黒な汚れで，油の蒸気の、
現れていた，長年の記念物となって，何千人かの小さな注文の，調理され食べられ忘れ去られた。

夜のカウンター担当の男は、
痩せた十九歳の若者であった、
彼のとても長い両腕は、
はみ出ていた，袖口の下に，うす汚れたシャツの、
まるで両腕が引き伸ばされたように、
なにかの我慢ならない機械にかけられたような。

細長い骨張った顔には、
まだ、

有った，にきびのあとが、 .
下唇がいつもわずかに垂れ下がっていた。
しじゅう唇をつきだし，人に向かって、 .
身ぶりであり，反抗の、 .
知らないようだった，決めかたを，自分の意思の。
時に，サムが入って行った、 .
男はＶ字型に折れ曲がって，カウンターと交差して、 .
乗せていた，からだ全体を，両肘に、 .
引き込まれているようだった，完全に、 .
荒々しい漫画本に，開いて見ていた，彼の前に。
現われたので，警官が、 .

彼は素早く入れた，読んでいた物をカウンターの下に、．

ぴんと伸ばした，狭い両肩を、．

備えた，何十分かの時間に応ずる，彼が過ごす，警備する警察官と，この眠っている街を。

彼は、．

手を伸ばした，厚手のコーヒーマグに，サムが座ると，一つに，．

三つの辛うじて使われているカウンターの前の腰掛けの，布で被われている椅子が無傷のままの状態で。

「コーヒーはいらない、．

ラルフ、．

今日は暑すぎる」

サムが言った。

「呉れ，コーラの大きいのを，代わりに」

彼は脱いだ，制帽を、

ぬぐった，右腕で，ひたいのあたりを。

夜勤の若者は、

すくい入れた，傷だらけのグラスに，半分ほど，かき氷を、

瓶の栓を抜き、

満たした，グラスに，コーラと泡を。

コーラの泡が落ち着くと、

サムは飲み干し、

噛み砕いた，氷のかけらを、

そして男にたずねた。

「どっちが勝ったんだ、.

今晩のボクシングは？」

「リッチだ」

カウンターの若者が答えた，すぐに。

「判定が割れたけど、.

とったらしいよ，挑戦権は」

サムは自分で一杯にした，グラスを、.

飲み干した，再び、.

彼が意見を言う前に。

「良かったよ，リッチが勝って、.

あまり好きじゃないが，イタリア人は、.

しかし、.

少なくとも白人が挑戦権をとったんだからな」　.

カウンターの男はうなずいた，賛同して。

「六階級は黒人のチャンピオンだ，今はね，上の方の。

分からないね，奴らはどうしてあんなに強いのか」　.

彼は、　.

押し当てて，両手をカウンターに、　.

ひろげた，骨ばった指を，無駄な試みをした，それが見えるように，強くて力のあるように。

彼は、　.

見ながら，警官の頑丈な手を、　.

考えた，彼自身の手もあのようになるだろうかと。

サムは、.

自分で，ケーキを取った，一つだけ残っていた，傾いて，曇っているプラスチックの入れ物に，.

カウンターの上の。

「奴らは、.

感じないんだ，なぐられた時に、.

お前やおれのようには」

彼は説明した。

「俺たちとは、.

違うんだ，神経系統が。

奴らは、.

動物と同じなんだよ。

ぶん殴るしかないんだ，斧で，奴らをノックアウトするには。

本当に。

実際のところ、.

奴らは勝ってきたし、.

怖くないんだよ，リングに上がるのが」

ラルフは、.

しきりにうなずいていた。

目が告げていた、.

サムが宣言していると，締めの言葉を，このテーマについて。

彼は直した，ケーキの入れ物のふたを。

「マントリが町に来ていた，今晩。

連れて来た，娘も。

たいへんな美人だと，話じゃ」

「思っていた、．

彼は来ないだろうと，来月にならなければ」

若者は体をのりだした、．

カウンターをふきながら、．

使い切ったびしょびしょのぼろ切れで。

「金がかかるようだ，予定していたよりも、．

完成するには，音楽堂を。

それで、．

想像しているようだ、．

主催者が返済するには，助成金を，期限内に、．

彼らは上げなければならない，入場料を。

マントリは、.

料金をいくらまで上げられるか、.

相談にのるために来たってことだぜ」

サムはコークの残りをコップにあけた。

「どういうことになるかな」

彼は言った。

「万事うまくいくかもしれんし、.

大失敗に終わるかもしれん。

おれはクラシック音楽のことはなんにも知らんが、.

マントリが指揮をするというだけのことで大勢の人間がここへやって来るとは思えんな。

交響楽団だとか、.

そんなことはわかっているが、.

そんな音楽の好きな連中は、.

なにもこんな所へ来て固い椅子に坐らなくたって、.

一冬じゅう同じ音楽が聞けるんだ。

雨でも降ったらどうするんだ」

コップを飲み干すと時計に目をやった。

「まったくだ。

どうなるんだか。

おれも音楽はあんまり好きじゃないし、.

そんな高級なのは縁がねえが」

ラルフが同調した。

「でも、.

連中が言うように、.

それがうまくいってこの町が有名になって、．
観光客が来て金を落としていくようなことになりゃ、．
ここだって修理してくれるだろうし、．
みんなの生活も少しはよくなるかもしれねえな」

サムが立ち上がった。
「いくらだ？」
「十五セント。
ケーキはおまけだ，残りもんだから。
お休み、ミスタ・ウッド」
サムは二十五セントおいて外に出た。

以前に、.

カウンターの男が生意気にも言った，彼を，サムと。

サムが与えたのだった，冷たい睨みつけを，不承知の、.

それは役立ったのだった。

「ミスタ・ウッド」となったのだ、.

それである、.

サムが望んでいたことだ。

彼は車にもどり、.

短く無線で署に連絡した、.

町に向かう前に，ハイウエイを，無線で署に連絡をしておいた。

彼は、.

納まった，座席に、.

気持ちになった，向かう，単調な仕事に、.

それはなる筈の，最後の部分に，この夜の。

外気は熱く澱んでいた，変わりなく、.

車のスピードを上げていたが。

初めてだった，彼が勤務についてから、.

サムは呪う気持ちになった，押しつぶされる暑さに，告げている，.

焼けつくような熱さの日を，あとも続く。

それは意味している、.

もう一つの熱い夜だ，明日も、.

多分に、.

暑い夜がくる，更にその後に。

サムは、.

速度を下げた，車の、.

町の中心街が見えてきたので。

この夜もいつものように人影はなく、しかしサムは運転した，ゆっくり，小さな中心街では、.

習慣になっていて。

彼は思った，再び、.

デロレス・パーディのことを。

彼女は結婚するだろう，年若いうちに、.

彼は確信した、.

どこかの男がたくさんの楽しいことを，セックスして楽しむだろう，彼女と。

その時、.

一ブロック先に、.

彼は見た，何かが横たわっているのを，路上に。

サムはアクセルを踏んだ、.

車はスパートした。

光の中で，四個のヘッドライトの、
目標物がだんだん大きく見えてきた、
サムはブレーキを踏んで車を停めた，まん中に，道の、
数フィート手前で，今は人間と分かる、
手足を伸ばした姿勢で横たわっている，舗道に。

彼は点け，赤い警告灯を、
急いで降りた，車から。

彼は、
かがみこむ前に，その男を調べに、
彼はまず警戒の目を配った，男の周辺に、
手をかけた，腰の拳銃に，とっさに行動できるように。

何も見えなかった，静かに佇んでいる建物と、．
しっかりした舗道のほかには，両方向に伸びている。
心配はない考え，当面は、．
サムは片膝をついた，男のそばに，道路上の。
男は横たわっていた，腹這いで、．
両腕を頭上に伸ばし、．
脚をひらいていた。
顔が向いていた，左に、．
だから、．
右の頬を押し付けていた，すりへったコンクリートに。

頭髪が異常に長く、
それが覆っていた，首の後ろを、
そして、
カールしていた，触れるあたりで，襟に，上衣の。
彼の脇に，五・六フィート離れたところ、
銀の握りのついたステッキが、
転がっていた，妙に頼りなげに，道路上に。
サムは差し込んだ，左手を、
下に，倒れている男の体の、
感じるか試した，心臓の鼓動を。

うだるような暑さにもかかわらず、.

男は着ていた，チョッキを，キチッとボタンをかけて。

チョッキを通して、.

サムは感じた、.

証拠はないと，男が生きているという。

その時、.

彼は思い出した、.

読んでいたことを，一見死体と見える人体について。

サムは、.

受けていた訳ではなかった，何か特別なコースを，訓練の，この仕事のために。

彼は要するに、.

採用され名前が載り，給与支払い表に、.

説明を受けた，まる一日，新しい任務について、.

そのまま仕事についた。

しかし、.

指示されたように、.

彼は読んだ，市・郡・州の法規集を、.

読んでいた，２・３冊の教本を，利用可能な，小さな署の本部の建物にあった。

サムは記憶は良かった、.

知識は，彼が吸収した，思い出された，彼に，今も，必要な時に。

想定してはならない，一人の人間が死んでいると、．

医師によって宣告されるまでは。

その人は失神しているかも、．

気絶しているかも、．

あるいは意識不明に陥っているのかもしれない，ほかの幾つかの理由によって。

人が，インシュリン・ショックを受けた、．

間違えられた例はよく有る，死人と、．

ある例では、．

息をふきかえした例もある，持ち込まれたあとに，死体収容所に。

場合でなければ，人体が非常な損傷を受けている，生存が不可能である，．

たとえば首がないというような，常に想定すべきである、.

人は生きている、.

腐敗が生じている，度合いまで，生命が存在しえない。

サムは急いで，戻った，車に、.

取り上げた，無線電話のマイクロフォンを。

この時間では、.

拘らなかった，使うことに，公式な用語を、.

話した，迅速に，明確に，すぐに，彼の呼びかけが返答されると。

「交わる角で，パイニイ通りとハイウェイの，おおよそで言ってます，男が道路に倒れており、.

考えられる，死んでいると考えられる。

状態ではなく，誰かが近辺にいる、．

通行もなかった、．

ここ数分間に。

派遣してくれ，医師と救急車を，直ちに」

言い終わってから、．

サムは思案した，しばらくの間、．

使っていただろうかと，適切な言葉を，この報告で。

これは新しい経験だった，彼の、．

そして、．

彼は望んでいた，取り扱ったことを，適切に。

すぐに、.

声が，夜勤交換手の、.

彼を，我に帰した。

「その場で待機しておれ。

識別できるものはあるか，被害者を？」

サムは頭を働かせた，急いで。

「いや、.

まだない」

彼は答えた。

「私は見たことがない，この男を，私の知っている限りで。

しかし、.

思っている，知っていると，誰だかを。

彼は髪の毛が長く、.

チョッキを着ていて、.

ステッキを持っている。

小柄で、.

身長五フィート五インチ程度だ」

「そりゃ、.

マントリだ」

交換手が叫んだ。

「指揮者だ。

中心人物だ，こんどの音楽祭の。

万一それが彼で、．

死んでいるとすると、．

たいへんなことになるぞ。

くり返す、．

その場で待機せよ」

サムは戻した，マイクを受け台に、．

行った，急ぎ足で，戻って，倒れている男のところへ。

わずか九ブロックの距離しかないので，病院までは、．

救急車が来るだろう，五分もたたないうちに。

時に，サムはかがみ込んだ，男の上に，もう一度、

彼は思い出した，轢いてしまった犬のことを、

しかし、

これは限りなく重大なことだ。

サムは伸ばした，手を、

乗せた，たいへん穏やかに，後頭部に，男の頭の、

まるで彼が触ることで、

確かめ伝えることが出来ると、

救助がすぐ来ると、

だからこの男は少し横になっていればいい，荒い舗装の上に，あと２・３分間だけ、

その間は、

彼は一人ではないのだと。

そのような考えを思っているときに，彼の気持ちで、.

サムは気が付いた、.

何かが，べったりしネバネバした、.

しみ出ている，彼の指のあいだに。

速い無意識の動作で、.

彼は手をひっこめた。

哀れみの気持ちが，今まで感じていた、.

徐々になくなり、.

烈しい怒りの気持ちが燃え上がってきた，代わりに。